

中国における日本神道研究の現状と展望

劉 勁 聰

The Research about Japanese Shintoism in China

LIU Jincong

神戸女学院大学 2013年度客員研究員、中山大学 社会学と人類学学院 博士課程在籍、
広東外語外貿大学 東方言語文化学院 準教授

連絡先：劉勁聰 〒510420 広州市白雲大道北2号 広東外語外貿大学東方言語文化学院日本語学科
liujincong@hotmail.com

要 旨

神道は日本民族の民族宗教であり、日本民族の中で発生し、その全生活の根底としてきた固有の民族宗教である。また日本民族の生活の基礎とした精神的ないとなみも広く神道と称される。中国の学術界では、日本神道についての研究は80年代に始まってから既に三十年余りになる。筆者は中国で最大の学術情報データベース（CNKI）と読秀中国語学術データベースに収録された学術図書、雑誌、学術論文、博士論文、重要学術会議論文などを検索することにより、150件の日本神道についての研究成果を収集した。本稿では、これらの研究成果に基づいて中国における神道研究を紹介し、分析するのに加えて、自身の個人的な見解を提出し、今後の研究に啓発をもたらすことができるのではないかと期待している。

キーワード：日本神道、三十年間、研究分野、研究特徴

Summary

Shintoism has been a national religion in Japan since ancient time which developed on the basis of Japanese inherent race or gods. It includes not only the belief in gods and the traditional memorial ceremony, but also a wide range of life customs and ways of thinking. The research about Japanese Shintoism in Chinese academic circles began in the early 1980s, more than three decades ago. In this paper, the author collected 150 articles on research about Japanese Shintoism through a Chinese Journal Full-text Database and Chinese Duxiu Academic Retrieval System, and described, analyzed and reorganized their research results specifically. Meanwhile, the author also put forward some opinions of his own and hoped that it could give some inspiration for further research in this field.

Keywords: Japanese Shintoism, three decades, fields, research characteristics

はじめに

中国では、日本の神道が注目されたのは清時代末中華民国初期だった。当時の有識者たちは国家の繁栄を図るため、中国から日本に視察に訪ねてきて、多くの日本研究書も撰した。そのうち、黄慶澄著『東遊日記』、王韜著『扶桑遊記』、何如璋著『使東述略』、傅雲龍著『遊歴日本図経』などの著作に神道、神社についての記述も見られる。日本駐在の使者としての黄遵憲氏が撰した『日本国志』『礼俗志』篇には、歴史の面から祭祀や風俗などを紹介する巻もある。中に「日本開国以来、国の大事は祀より大なるはなし」と記載されている。その後、戴季陶氏は『日本論』で日本の神道について、「表面から見れば、日本では最も盛んな宗教は仏教なんだけど、実は日本の統治者が崇拝している宗教は神道なのだ」と指摘した。また、戴季陶氏は次のように述べている。「日本という国が世界で他に類のない国だ。」「日本人が神様の直系の子孫だ。」「大和民族が神に選ばれた世界で最も優秀な神の民族だ。」と深く信じている¹⁾。彼の日本人に対する分析と批判は実に適切だろう。

本稿は1980年から三十年余りの中国大陸における神道研究を考察することにより、中国の学者の日本神道についての研究状況及び成果を紹介し、各分野の先駆的研究者の研究目的などを中心に述べる。総じて言えば、本稿では、中国での神道研究を8つの研究分野に分けて考察すると同時に、今後の研究の方向性と展望について述べる。

本稿では、中国学術情報データベース（CNKI）と読秀中国語学術データベースに収録された公開発表の中国語の学術刊行物、学術図書、博士論文、重要学術会議論文などの研究成果に基づいて分析を行う。少しも漏れることなく全面的にその研究成果を集めようと思うが、やはり漏れるところがあるかもしれない。しかし、本稿は、1980年からの三十年余りの中国における日本神道研究の全体的な現状を把握し、評価するには、独特の価値と意義があると考えられる。

一、中国における神道研究三十年の回顧

中国における神道研究についての論述を展開する前に、まず全体の研究状況を示したデータを見てみよう。2013年1月に、筆者が「神道」を「題名」、「キーワード」、「主題」にして中国学術情報データベース（CNKI）と読秀中国語学術データベースを調べた結果、下記の結果となった。

本稿では、この三十年間の研究成果を80年代、90年代及び2000年以降という三つの段階に分けて考察する。筆者が検索した150件の研究成果のうち、80年代が8件、90年代が25件、2000年以降が117件あった。

中国における日本神道についての本格的な研究が始まったのは80年代である。発表の成果から見れば、天津社会科学院研究所の聶長振氏が中国において日本神道を研究する第一人者だと言える。聶氏は日本語が堪能で、中日宗教文化比較に重点を置いて研究を行っていった。1982

表 中国における神道研究の研究成果統計（1980-2012年）

| | 研究書 | 訳著 | 教材 | 論文集 | 学術論文 | 計 |
|-----------|-----|----|----|-----|------|-----|
| 1980-1989 | | | 1 | | 7 | 8 |
| 1990-1999 | 4 | 2 | | | 19 | 25 |
| 2000-2012 | 15 | 10 | 2 | 1 | 89 | 117 |
| 合計 | 19 | 12 | 3 | 1 | 115 | 150 |

筆者の作成、2013年1月（単位：冊、本）

（出典：中国学術情報データベース（CNKI）、読秀中国語学術データベース）

年に、聶氏は中国の定期刊行物『世界宗教研究』に発表した「日本稲荷神社と中国民間信仰との関係」という論文で、神道とサマン教の間にはつながりがあると主張した。また、聶氏は日本の学者村上重良の著作『国家神道』を翻訳して、1990年9月に中国で出版した。神道の研究に従事した学者がわずかで著作や論文が更に数少ない当時、聶氏が学術の禁錮を打破し、現代中国における神道研究の第一歩を踏み出した第一人者と言えるだろう。それと同時期に、山東大学哲学系教授王守華著『日本哲学史教程』の第四章「神道哲学思想」には、はじめて中国で神道思想の全貌についての紹介が記載されたため、神道の日本哲学思想史上で占めるべき地位が確立された²⁾。また、80年代に神道研究成果を写し出した論文も発表された。

90年代に日本の学者の神道研究書が翻訳され中国に伝わってきた。村上重良著『国家神道』と『宗教と日本現代化』はそれぞれ聶長振氏と張大柘氏により翻訳されたものである。王守華氏が和光大学に務めていた間に撰した『日本神道の現代意義』という著作は本間史氏により日本語版に翻訳された。そのほか、中国社会科学院民族学と人類学研究所の研究員色音氏（1990）の撰した『日本神道教と文化』及び中国社会科学院世界宗教研究所研究員張大柘（1991）著『当代神道教』も挙げられる。それに、定期刊行物に公表された研究論文が18本もある。数から見れば、90年代に収められた研究成果が80年代の三倍となった。

21世紀に入ると、中国における神道研究成果は80件以上になり、様々な分野に広く及んでいる。そのうち、代表的なのは王守華及びその弟子の論著だと言ってよい。王守華、王蓉（2010）の撰した『神道と中日文化交流』、範景武（2001）著『神道文化及び思想研究』、王維先（2004）著『日本垂加神道哲学思想研究』、牛建科（2005）著『復古神道哲学思想研究』などが挙げられる。そして、杭州大学の日本研究所が中国の各大学との共同研究で関連研究を展開することにより、一連の研究成果も公表された。例えば、王金林（2005）著『日本人の原始信仰』と（2007）『日本神道研究』、王宝平（2003）により編集された論文集『神道と日本文化』などがある。また、遼寧大学の日本研究所の劉立善（2005）著「教義がない宗教—日本神道」、北京大学外国語学院の劉琳琳（2009）著『日本江戸時代における庶民伊勢信仰の研究』、温州大学人文学院の張愛萍（2005）著『中日古代文化源流：神話比較研究を中心に』なども挙げられる。それに、訳著が10冊と研究論文が80本余りもある。

この三十年間、中国における神道研究は大きな成果を出したと言えるが、早い段階での研究として全面的、総括的な紹介に偏っていたり、日本の学者の研究成果を繰り返したりしただけ

で、内容の重複が多く、且つ創造性に乏しい。ただし、より一層研究を推進するための基礎を築いてきたと言える。後期になって研究が更に深く展開されるにつれて、自分なりの見解を提示する中国人も多くなってきた。

二、中国における神道研究の研究分野

中国における神道研究の三十年間を振り返ってみると、日本神道についての研究を8つの分野に分けることができる。それは、1、神道の哲学思想的研究 2、神道の歴史学的研究 3、神道の民俗学的研究 4、神道の政治学的研究 5、神道の文化学的研究 6、神道の人類学的研究 7、神道の文学的研究 8、神道と中国文化の研究である。各分野の主要研究成果についての概要は以下の通りである。

1、神道の哲学思想的研究

昔から今に至るまでの日本哲学思想に神道思想が貫かれていることから、日本哲学思想を理解するためには、神道哲学思想の解明が求められる。王守華（1997）著『日本神道の現代意義』（日本語版）と（2010）『神道と中日文化交流』は哲学思想、文化、政治、経済、社会生活などの視点から、神道の哲学思想、神道と日本文化、神道と環境保護、神道と現代の日本社会生活などの主題を論述し、中国の儒学、仏教、道教及び陰陽五行が日本神道思想の形成と祭祀儀礼に与える影響も分析された。つまり、自然観、論理思想、歴史観、環境思想、神靈感などの面から神道哲学思想について論じられているのである³⁾。王維先（2004）著『日本垂加神道哲学思想研究』は大量かつ詳細な資料で垂加神道の教義と朱子学の主張を比較、分析し、両者の相違点を探し出すことにより、神道という日本の固有の民族文化形態が外来文化を取り入れる過程を解釈した⁴⁾。牛建科（2005）著『復古神道哲学思想研究』は実証研究と理性分析を結合することにより、復古神道哲学思想に対して全面的かつ深く掘り下げた研究を行った。その研究は日本民族が外来文化を吸収したり発展させたりする背景において、復古神道思想を全体的に整理し、復古神道の理論意義、実践意義及び国家神道や教派神道の思想との関係を明らかにした⁵⁾。津田左右吉著、鄧紅（2011）訳『日本の神道』は主に日本神道の性質、形成、発展変化及び思想発展史への影響などの内容について考察した。そのなかで、儒教、道教などの中華思想が日本神道に与える影響はその著作の中核内容として、中国思想の中にどのような要素がどのような 방식으로日本人に吸収されたか、また、日本人の生活にはどのような役割を果たしたかといった問題を解決したため、歴史や事実の面でかなり高い学術価値を有した⁶⁾。

2、神道の歴史学的研究

日本では、神道の歴史学的研究が神道研究において主流となりつつあるのに対して、中国においてはその関連の研究結果がまだ数少ない。王金林（2007）著『日本神道研究』は原始神道から、中国道教が日本神道に与える影響、皇室神道の成立、神道と中国儒教との結合、外来仏教との対立及び融合、日本国家神道の形成、作用及び日本戦後の神道などの内容に至るまで述べ、日本の歴史区分ごとに形成された主要な神道やその思想に重点を置いて論じた⁷⁾。この著

作は歴史の発展を手がかりとして日本神道を系統的に研究を行ったため、近年の中国の学者が収めた全面的、総合的な研究成果でもあれば、日本神道についての通史でもあると言えるだろう。

3、神道の民俗学的研究

神道民俗学とは、明治維新以降の特定の歴史条件下で形成され、民間民俗において発生した様々な神道現象を行った研究である。欧米の先進的な文明制度、文化知識や科学技術が絶えず日本に流れ込むのに伴い、イギリス、ドイツをはじめとして、人類学、民俗学についての書籍も大量に日本に伝わってきたため、神道の民俗学的研究は神道研究を大いに啓発した。川田稔著、郭連友（2008）訳『柳田国男の描いた日本—民俗学と社会構想』は柳田国男の日本原始神道——氏神信仰に対する研究の考察と分析により、学術的な角度から日本神道の源流と真相を論じ、人々が日本の伝統的な神道に対する誤った認識を明らかにした⁸⁾。刘琳琳（2009）著『日本江戸時代における庶民伊勢信仰の研究』は信仰組織、信仰行為と信仰思想という三つの面から江戸時代における庶民階層の伊勢信仰を集中的に考察、研究した⁹⁾。

4、神道の政治学的研究

国家神道は、明治政府が中央集権的な統一国家体制を確立するにあたり、天皇制を宗教的に基礎づけるという役割を果たすことになった。また、国家神道は、国民の思想統制のための強力な武器として政治的に最大限に利用され、政治権力と行政手段で「国家宗教」という地位にまで上がってきた。そして、神社も国家の管理下に入ることが公認された。中国における神道の政治学的研究は天皇制、国家神道、日本軍国主義への批判に集中した。村上重良著、聶長振（1990）訳『国家神道』は神道の形成、発展、変化及び各種の流派についての説明以外、近代の国家神道の出現及び思想構造や、統治階層に利用された国家神道が侵略戦争を正当化することへの批判と分析に重点を置いて論じている。高橋哲哉著、黄東蘭（2008）訳『靖国問題』は日本社会でだれもが知っているが、よく知らない「忌み」にあたる靖国問題を鋭く指摘した。本書は靖国問題をめぐる「文化」、「歴史」、「政治」などの疑問を明らかにすることに大きな役割を果たした¹⁰⁾。歩平（2011）著『靖国神社と日本軍国主義』は日本社会の内部深くまで分析することにより、靖国神社問題の発生について深く、全面的に考察し、歴史と現実の角度から靖国神社問題の歴史由来及び靖国神社と日本軍国主義との関係を研究した¹¹⁾。

5、神道の文化学的研究

神道は日本文化の発展を推進する上で大きな役割を果たした文化の根源である。中国における神道の文化学的研究には日本民族性、飲食文化、企業文化、茶道、武士道などの関係が含まれている。色音（1999）著『日本神道教と文化』には、神道の概述、神道と政治文化、神道と神話伝説、神道と儒教・道教・仏教との関係、神道と皇室儀礼、神道と日本民俗、神道の民族特色などの7つの部分が収められた¹²⁾。王宝平（2003）著『神道と日本文化』は日本神道文化研究についての論文を15本収録した論文集である。その論文集に収録された論文は思想または

歴史、民族の角度から中日文化交流に融合して日本神道を考察した¹³⁾。深見東州著、宋勇慶（2004）訳『UNDERSTANDING JAPAN』は神道とは何か、神道と日本人の生活との関係などの紹介のほかに、現代日本ビジネスマンに広く応用される神道信念、哲学と思想などの記述に重点を置いて記載した¹⁴⁾。

6、神道の人類学的研究

牛建科（2011）著『日本神道教の機能論』は人類学の視点から神道を分析する唯一の論文である。牛建科氏は社会学者楊慶堃氏の「拡散型宗教」と「制度型宗教」という概念を借用し、日本神道の存在方式と機能の実現が、「拡散型宗教」から「制度型宗教」へ、そして再び「拡散型宗教」へのプロセスを経たことを指摘している。牛建科氏は、デュルゲムによる宗教社会学の視点からの、クリフォードギアツによる文化人類学の視点からの宗教の象徴意義の分析により、神道の象徴機能の分析に対して啓発的な意義があると述べた。神道は社会の象徴として、氏族の象徴でもあれば、地域共同体の象徴でもあると同時に、文化象徴としても重要な機能も備えている¹⁵⁾。

7、神道の文学的研究

神道の文学的研究とは、神道が歌、話、軍記、謡曲などの文学への影響のことである。王玉輝（1998）の論文『神道と日本言語』は、日本人の神に対する構造が日本人の心の内面世界だけでなく、外に現れた形式—言語の構成パターンと表示方式にも影響を与えたと述べた。外に現れた形式を通して神道が日本の言語に与えた影響を分析し、日本人の言語表現に潜められた心理の奥義を探求した¹⁶⁾。宋嘉揚（2005）の論文『日本神道と郭沫若の早期詩歌』には、日本神道の中に出てきた「和魂」、「荒魂」といった内容や、天皇崇拝、太陽崇拝及び祖先崇拝などの現象が全て郭沫若の早期詩歌創作の尽きることがない素材や枠組みになったことが述べられた。中国で薫陶した伝統的な文化の内容と結合した結果、日本神道の色彩に溢れた画面が構成されたため、郭沫若の早期詩作が日本神道の色彩を帯びていたという特徴があるのも無理はないだろう¹⁷⁾。

8、神道と中国文化の研究

20、30年代から、戴季陶、郭沫若などの学者は中日両国による思想文化の差異に注目していた。近年、思想文化は依然として研究者が関心を持ったテーマである。中日比較は主要的な研究方法の一つとしてよく用いられている。王金林（2005）著『日本人の原始信仰』は、大量の文献、考古と民俗資料により、中日比較文化研究の視点から、日本人原始信仰の形成及び影響を緻密に論述し、分析した¹⁸⁾。張愛萍（2005）著『中日古代文化の源流—神話の比較研究を中心に』は中日神話の発生と変化について比較研究を行った。民俗学、哲学、歴史学、宗教学、舞踊学などの各方面から中日神話を深く分析した。全書には両国の地震神、風神、雷神、山神、水神、独身神、偶身神、それに水神を祭る方式という八つの部分に分けられた¹⁹⁾。麻国慶（2000）の論文『社会結合の紐帯——日本の神社と中国の廟』は中日両国の神社と廟の祭祀と

理念、構造と機能などの考察比較により、中日社会構造の差異を分析した²⁰⁾。

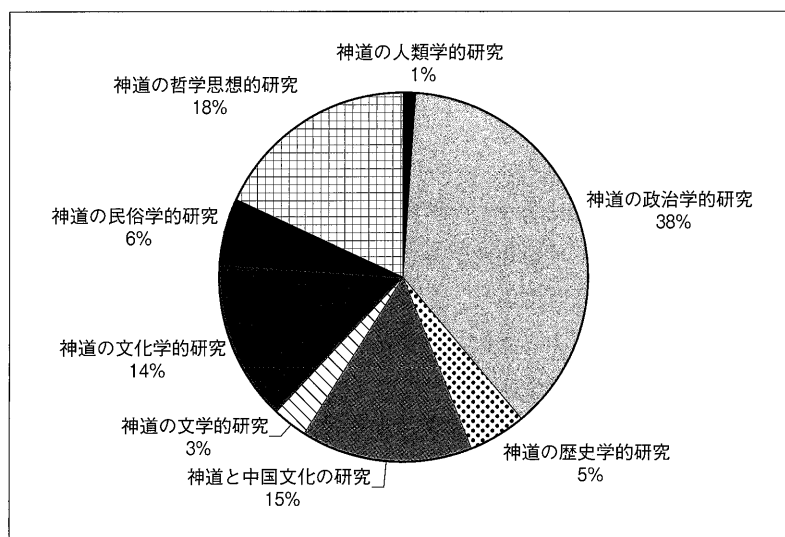
三、中国における日本神道研究の特徴

中国における神道研究の研究成果を分析した結果、三つの特徴にまとめる事が出来る。まず一つは、哲学思想的、政治学的研究が多いことである。図のように中国における神道研究は哲学・思想と政治学の視点からの研究成果が半数以上を占めた結果になった。そのうち、哲学思想的な研究成果として、王守華教授及びその弟子たちの研究成果が特に注目される。王守華教授は日本哲学の学習がきっかけとなり神道研究を始めたのである。神道の学習から神道の研究まで40年余りにもわたった。神道を専攻として育ててきた優秀な学生と共に、中国において日本神道を研究する主な陣営を構成し、神道哲学思想の面で大きな成果を遂げたと学界に公認された。中国における神道の政治学的研究成果は国家神道を批判する日本学者の訳著と中国政治学者の論文を中心とした。神道が日本軍国主義の精神の中心的存在であることは多くの中国人政治学者の見解である。20世紀の前半、日本の軍国主義が発動した侵略戦争は中国人民に深刻な災難をもたらし、日本の人民にも被害を受けさせた。歴史を忘れず、今後の教訓とするために、前向きな態度で神道を研究するのは重要な意義があることと考えられる。

二つ目は、神道と中国文化との関連性についての研究が多いことである。中国における神道研究は日本に伝わってきた中国文化の道教、儒教、佛教思想が日本神道の発展に対する影響と役割などの分析や論述などに集中した。日本神道の発展が各段階で直接または間接に中国大陆からの道教、儒教、仏教思想の刺激と影響を受けたと指摘したのは中国人ならではの神道研究の特徴と言えるだろう。

三つ目は、研究書と優れた訳著が少ないことである。中国における神道研究の成果は論文が主としているのに対して、研究書が数少ない。それに、神道研究についての研究書が一つか二

図 中国における日本神道研究の分野別研究成果統計図



筆者作成、2013年1月

つの分野に限定された。要するに、中国において日本神道に関する研究に従事する人が少なく、力もまだ弱いのは神道研究の意義に対する認識不足が関係している。また、中国における人文学研究では、テーマの選択は近現代の政治、経済、文化などの面を重視しているが、神道のようなテーマでは、人力、経費などが確保できない。訳著としては、日本神道についての研究著作の原文を完全に理解するために、優れた言語能力だけでなく、中国文化と日本の思想文化の両方をよく理解する知識が必要なのである。日本語ができるだけでは神道を研究したり、神道についての著作を翻訳したりするのは難しいだろう。

終わりに

以上、中国における神道研究の状況を概観してきたが、結論と言えることは、中国における神道研究はその量と質において、独自の研究領域として自立できる段階までに至っていないということである。今後の研究について筆者は自分なりの見解を述べたい。まず神道研究を行う人材の育成の強化である。現在、新中国一代目の神道研究者と言われた学者聶長振、王守華、張大柘、王金林は既に年を取り、二代目の範景武、牛建科、王維先、劉琳琳等も指折り数えるほど少ない上に、代表的な研究成果がまだ出版されていない。そのため、今後、研究を行う人材の育成の強化は最も重要な課題になる。例えば、一部の日本語教師が神道の研究に呼びかけるのも一つの解決策だろう。現在、中国において、日本語学科を設けた大学や専門学校が600校余りもあり、優れた日本語能力を持ち、且つ日本文化を専攻した日本語教師が多くいるため、神道研究の潜在力として育成を強化すべきである。

次に、日本神道研究の専門機関の設立による学術交流の強化である。近年、神道の研究を展開した中国社会科学院日本研究所と杭州大学日本研究所は二つとも日本神道を専攻する機関ではなく、中国において、今まで日本神道を専攻として研究を行う学会はまだ存在していない。神道の研究は宗教学、歴史学、哲学、考古学、民俗学、政治学、社会学等様々な分野に及ぶため、各分野の研究者による相互の学術交流が欠かせないものと考えられる。専門の研究機関と学会を設立することは神道研究の発展を推進するのに大きな役割を果たすことができると思われる。

最後に、今後の日本神道研究はフィールド調査の他者研究を更に重視すべきである。現在、中国における神道研究は日本の学者の研究成果に基づいた文献の解説や中国人の視点から中国文化と結合した研究を主としているため、日本の学者のこれまでの研究成果に比べると、創造性がなく新しい研究が実現できなかった。筆者は人類学と民俗学の視点からフィールド調査による他者研究が創造性を備える研究方式の一つと考えている。今まで中国における日本神道の研究はほとんど日本人の文献に対する整理や分析にとどまっていたのである。これから中国人が日本の社会に入り、社会文化を自分自身で体験し、研究対象となる文化に触れることにより最新の資料を入手することが必要だろう。これによって、日本人の精神世界に対する理解の推進に大きな役割を果たすことができると考えられる。

王守華氏が「日本学専攻の研究者にとって、神道が分からなければ、本当の日本が分かるわけがない」と指摘したように、神道がわからないかぎり、日本文化の奥底に潜められたものが

わからないゆえに、「日本学専攻の研究者にとって、神道を理解するのがとても大事なことだと考えられる」^[21]。日本人や日本文化が深く理解できるように、更に多くの学者が神道研究に加わって、異なった視点から神道を研究することを心から期待したい。

注

- 1) 王金陵『日本神道研究』、上海辞書出版社、2007年12月。
- 2) 王守華、卞崇道『日本哲学史教程』、山東大学出版社、1989年5月。
- 3) 王守華、王蓉『神道と中日文化交流』、河北人民出版社、2010年12月。
- 4) 王維先『日本垂加神道哲学思想研究』、山東人民出版社、2004年1月。
- 5) 牛建科『復古神道哲学思想研究』、齊魯書社、2005年7月。
- 6) (日) 津田左右吉(著)、鄧紅(訳)『日本の神道』、商務印書館、2011年9月。
- 7) 王金陵『日本人の原始信仰』、寧夏人民出版社、2005年2月。
- 8) 川田稔(著)、郭連友(訳)『柳田国男が描いた日本—民俗学と社会構想』、外国語教学と研究出版社、2008年12月。
- 9) 劉琳琳『日本江戸時代庶民伊勢信仰研究』、世界知識出版社、2009年2月。
- 10) 高橋哲哉(著)、黃東蘭(訳)『靖国問題』、生活・読書・新知三聯書店、2007年8月。
- 11) 歩平『靖国神社と日本軍国主義』、黑龍江人民出版社、2011年3月。
- 12) 色音『日本神道教と文化』、中央民族大学出版社、1999年1月。
- 13) 王宝平 主編『神道と日本文化』、北京図書館出版社、2003年12月。
- 14) 深見東州(著)、宋勇慶(訳)『UNDERSTANDING JAPAN』、文化芸術出版社、2004年。
- 15) 牛建科『日本神道教機能論』、『日本研究』、2011年1期。
- 16) 王玉輝『神道と日本言語』、『日本研究』、1998年第02期。
- 17) 宋嘉揚『日本神道と郭沫若の早期詩歌』、『重慶広播電視大学学报』、2005年第2期。
- 18) 王金陵『日本人の原始信仰』、寧夏人民出版社、2005年2月。
- 19) 張愛萍『中日古代文化の源流：神話比較研究を中心に』、浙江大学出版社、2005年8月。
- 20) 麻国慶『社会と結合の紐帯——日本の神社と中国の寺』、『グローバル化と中国、日本』、新華出版社、2000年。
- 21) 王守華、王蓉『神道と中日文化交流』、河北人民出版社、2010年12月。

* 本研究は2013年広東外語外貿大学科研プロジェクト(13G8)「日本の神社組織の人類学研究」の研究成果の一部分である。

(原稿受理日 2014年2月27日)